

体験、記録、伝承から見いだされる

「故郷を失う物語」について

松井 新次

私が十一歳の時、先祖代々続いてきた部族の生活は突然終焉を迎えた。それは、私たちが望んだことでもなければ、快適な暮らしや私たちの権利を保証するものでもなかった。そして、すぐさま、私は見知らぬ世界へと無理やり放りこまれた。そこは、私が育った環境からすればとうてい想像もできないような異質な世界だった。自分自身を作り変えるためには、侵略者たちに同化するしかなかった。もともと、それができればの話であつたが。

(途中省略)

学校にたどり着くまでの間、私たちは、多くの白人を目にした。これほど多くの白人がいるとは、私たちの想像を超えていたのだった。彼らが私たちを目にした時の反応は、彼らが私たちのことをどう考えているかを雄弁に物語っていた。カスターの戦いからまだわずか三年しか経っていなかった当時の一般的な見方では、平原インディアンはこの世に迷惑を撒き散らすだけと考えられており、私たちがそこに存在していること自体がワカン・タンカ（ラコタ族の宗教に登場する創造主）の紛れもない過ちとされていた。鉄道の駅で停車するたびに、小さいインディアンの「野蛮人」を一目見ようとたくさんの白人がやってきた。小さい子たちは、ブラットホームに群がった白人たちを、窓越しに静かに座って眺めていた。中には、毛皮をすっぽりかぶって、両目だけ出している子もいた。ある所では、私たちは、列車から降りて、離れた食堂まで歩いていった。私たちの両脇は、私たちが「兵隊さん」と呼んでいた制服を着た人たちが固めていたが、彼らは警察官だったのではないかと思う。私たちが何の危害も加えない少女であることは明白だったので、これは恐らく私たちを守るためだったにちがいない。制服を着た人たちからさらに離れた所には、首を長く伸ばした白人たちがいた。彼らは喋ったり笑ったりして騒々しかった。白人たちは鋭い叫び声をあげ、私たちのまねをしようとした。どうやら、それは攻撃の時の叫び声のつもりらしかった。私たちは、不快感を覚えた。中には、本当に怖くなってしまった子もいた。私は、少女少女たちが押し合う中、群れるようにして安全な場所に逃げ込んだのを覚えている。だが、私たちはみな勇敢であろうとした。それでも私たちは、私たちに對して哀れみのかけらもないに決まっている白人たちの手によって、結局は死に追いやられる運命にあると思っていた。列車に戻ると、年齢が上の男の子たちが、自分たちだけでなく、私のような小さい子供たちの士気をも高めようと、勇壮な歌を歌った。私は、心の中でしばしばこの時のことを思い出す。それは、八〇人あまりの毛皮を着た少女たちが、罵声と冷たい視線を浴びながら、白人たちに囲まれるようにして行進する姿である。しかも、その白人たちは、私たちに對して憎しみと恐怖しか抱いていない。それは、征服者が被征服者を見下す時の態度そのものだ。白人たちの無理解に、つける薬などないのだ。

「スポッテッド・イーグルの大地」ルーサー・スタンディング・ベア著 より」

荒れ野よ、荒れ地よ、喜び踊れ

砂漠よ、喜び、花を咲かせよ

野ばらの花を一面に咲かせよ。

花を咲かせ

大いに喜んで、声をあげよ。

砂漠はレバノンの栄光を与えられ

カルメルとシャロンの輝きに飾られる。

人々は主の栄光と我らの神の輝きを見る。

弱った手に力を込め

よろめく膝を強くせよ。

心おののく人に言え

「雄々しくあれ、恐れるな

見よ、あなたたちの神を

敵を打ち、悪に報いる神が来られる。

神は来て、あなたたちを救われる」

そのとき、見えない人の目が開き

聞こえない人の耳が開く。

そのとき

歩けなかった人が鹿のように踊り上がる。

口の利けなかった人が喜び歌う。

荒れ野に水が湧きいで

荒地に川が流れる。

熱した砂地は湖となり

乾いた地は水の湧くところとなる。

山犬のうずくまるところは

葦やパピルスの茂るところとなる。

そこに大路が敷かれる。

その道は聖なる道と呼ばれ

汚れた者がその道を通ることはない。

主御自身がその民に先だつて歩まれ

愚か者がそこに迷い入ることはない。

そこに、獅子はおらず

獣が上がって来て襲いかかることもない。
 解き放たれた人々がそこを進み
 主に贖われた人々は帰って来る。
 とこしえの喜びを先頭に立てて
 喜び歌いつつシオンに帰り着く
 喜びと楽しみが彼らを迎え
 嘆きと悲しみは逃げ去る。

旧約聖書 イザヤ書三十五章

この二つの文章の共通点はいったい何だろうか。それは、どちらも故郷を失う体験と関係を持ち、書かれた文であるという事である。最初のものは、18世紀に北アメリカ先住民のラコタ族が、白人との戦争に負けた後、それまでの生活を送ることを禁止され、白人の指定した居留地に移動し生活することを強制された。そして子供たちは、白人の生活習慣や知識を学ぶために寄宿学校へ行く事になった。その子供たちの内の一人が、白人の世界で経験したことについて書いた回想録の一部分を抜粋したものである。

その次のものは、旧約聖書のイザヤ書のある箇所である。ここで預言者イザヤは、虐げられた人々が、神の力によって喜びの地へと帰還を果たすという内容の詩を歌っている。これは、長年安住の地を求めて、砂漠の多い厳しい土地で、長年戦争を繰り返し、苦しんできた、古代ユダヤ人の経験から生じた、平和と幸福への願いを、イザヤが歌ったものである。

この二つの文章の内容の背景に存在する、故郷を失うという経験は、これらの文章の作者やその家族たちが経験した事柄以外にも、過去から現在に至るまでに、世界中の数多くの民族や宗教に所属する沢山の人々が、経験したと言えるだろう。

それはどのような原因で起こるのだろうか。それは、大規模な自然災害や飢きん、病気の流行などにより起こる事がある。人々は多くの肉親や仲間を失ってしまったたり、住んでいた場所に留まることができなくなり、移動を余儀なくされる。そして、人々はそれまでの生活を全て失ってしまうのである。

また、それは人々同士の争いや戦争でも起こるだろう。ある人々が別の人々により、無理やり住んでいた土地を追い出されたり、暴力を受け、支配されることによって、それまで営んでいた生活の全てを破壊されてしまうという事実が、世界の歴史においてひんぱんにみられたことができる。

そして、自然災害よりむしろ、人間同士の争いや戦争が原因となって、故郷を失う

という体験が生み出される事のほうが、圧倒的に多いということ、また、これから扱う事柄も、ほとんどが、人間同士で起きた出来事になるという事を言っておきたいと思う。

では次に、故郷を失うという体験は、人間の経験する出来事のうち、どのようなものに当てはまるのだろうか、ということについて考えてみたいと思う。それは、次に挙げるうちのいずれか一つ、または両方であると考えられる。

それは、ある人々（あるいは個人）が、①自らの住んでいる土地を無理やり追われるという事。あるいは、②自らが営んできた生活を、著しく破壊されるという事。これには、一緒に暮らしてきた肉親や仲間の死や別離、また、自らの生活手段や文化を全く失うという事が当てはまる。

しかし、なぜ自らの営んできた生活を奪われるという事が、故郷を失うという事なのだろうか。北海道に住むアイヌ民族を例として考えたいと思う。アイヌの人々は、明治時代に始まった和人（日本人）による大規模な移住と開拓のために、狩猟や採集で食糧を得る、古来から伝わる生活様式を続ける事ができなくなってしまった。狩猟や採集は、和人により禁止されてしまったうえ、動物であふれていた自然そのものが開墾されてしまい、動物は減ってしまった。アイヌの人々は劣悪な土地を与えられ、農業で生計をたてるよう強制された。さらに、日本語を用いるよう強制され、アイヌ語は廃れていった。

確かにアイヌの人々は、現在も北海道に住んでいるが、人々が本来持っていた、独自の土地との関わりは失われ、別のものを強制されてしまった。人々の文化も大きく損なわれてしまったと言える。そして、このような経験は、耐えがたい程の苦しみを伴うものである。ここでは、土地から追い払われるのと全く同じことではないだろうか。

このように、同じ土地に住んではいても、そこでの生活や、人との繋がりを強制的に奪われてしまい、それまで営んできた文化を破壊され、断絶させられてしまった人々についても、「故郷を失う」という言葉を当てはめることができるだろう。なお、アイヌ民族が明治から大正にかけて経験した事について、後半から詳しく取り上げることにする。

さて、これまで考えてきた「故郷を失う」という出来事は、ある人が自分で経験する事かも知れないし、経験した人から聞く事により知ることかもしれない。また、過去の出来事についての言い伝え、または記録を読むことにより、知る事かもしれないと言える。そしてそれらは、その出来事について正確に伝えている場合があり、逆に不正確であり、事実でない事が伝わっていたり、偏った内容だったりする場合がある

だろう。これから、これらの「故郷を失う」という経験について伝える様々なものを、
「故郷を失う物語」として、記録としての扱いとは別のものとして考えたいと思う。

例えば、旧約聖書に書かれている古代ユダヤ人の歴史は、現実にあつた事なのか、また、それが正確に伝えられているのかということは、確かめる事は不可能だろう。はつきりと言える事は、それが旧約聖書の中に、今存在しているように書き残される理由となった原因が、古代ユダヤ人が過去に経験した事実の中に、必ずあるだろうという事だけである。その一方で、旧約聖書の内容が、一神教を信じる多くの人々に、非常に強い影響力を持っているという事は、まぎれもない事実であると言える。

これは、旧約聖書に限った事ではなく、世界中の人々がそれぞれ受け継いできた伝承全てに言える事である。また、文学作品などについても、同様の事が言えるだろう。このような、人間に対して感情的な影響力を持つものに、「物語」という語を当てはめたいと思う。

つまり、「故郷を失う物語」と言い表わされるものとは、①故郷を失うという体験をした本人が、それについて話したものの、②過去にある人々が経験した、故郷を失うという出来事について、それが後の人々に言い伝えられたり、記録として残されたものの、③そのような経験を題材として創られた文学作品など、このようなものが挙げられるだろう。

「故郷を失う物語」は、史実としての現実性をもつものとは限らないが、心理的な経験としての現実性を持つものである。それは、心で経験された出来事、感情的な体験をありありと保存しているものであり、それが言い伝えられ、残されているものと言えるだろう。もしそうでないとしたら、それは除外されなければならないだろう。具体的に言えば、それは、体験談、記録、文学作品、伝承、民話などの中に見いだされる、故郷を失うという体験に関係したものであるというと言えることができる。

しかし、文章で書かれたそれぞれのものは、あるひとまとまりの「故郷を失う物語」の中の一部であり、断片にしか過ぎないという事に留意する必要があるだろう。全体としての「物語」は、現実には起きた出来事を起点とした、それに関係を持ち、心で経験される出来事全てである。そしてそれは個人のものでなく、それに関わる人は、「物語」の全体に対して責任を持つことになるだろう。「物語」は、時間の流れと共に後の人々に伝えられ、姿を変えながらも、長い時間保存されるだろう。それは人々の心を捉え、行動を変えさせる。そして、現実を変化させる影響力をもつものである。もしそれを受け継いだ人々が、再度同様の出来事を経験するのなら、それはその人々にとって、一段と忘れがたいもの、宿命的なものとなり、さらに長い時間伝えられていくだろう。

もし、この「物語」に触れた人が、それについて語ろうとするとき、その人は、「物語」に対してその意味を正しく伝えなければならないという責任を負うことになる。

どのようにすれば「物語」の意味を正しく伝えることができるだろうか。まず、「物語」は元来、その元となる体験を持った当事者や、それを受け継いだ集団に所属する人たちのものだということをわきまえておく必要がある。それは当事者にとって、自らの生い立ちと強い繋がりを持ち、様々な感情をかきたてられるもので、他人に簡単には触れられたくはないと思うものかも知れない。また、もともとは関わりのない部外者にとつては、その感情を理解するのは簡単なことではなく、深い理解を得るためには長時間の真剣な努力が必要になると思われる。だから、充分にその「物語」についての理解を得たと感じるものが出来ない限り、それを言葉にしてはいけないだろう。そして、当事者が語ったものと、部外者が言葉にしたものとは、当然区別されるべきだろう。もし部外者が「物語」について取り上げたいと思う場合、また、調査や取材から、それを見つけ出したいと願う場合、そこに自分の思い入れなどが入り込んでいないと、それに対しての客観的な姿勢を保ち続けなければならないと言えるだろう。

しかし、なぜ世界中に存在する、「故郷を失う」という出来事に関係するものを探し出し、それについて「物語」として考察する必要があるのだろうか。それは、もし世界中の「故郷を失う」という体験について、それが民族や宗教の違いに関わらず、共通点を持ち、類似したものであり、同じ図式に属したものであると考える事ができるのなら、私達は自らが経験したものと同様の物語を、他の集団に属する人々も経験したという事により、お互いの経験から共感を得、理解や知恵を得る事ができるのではないだろうか。そのためには、所属する国や民族、思想、住んでいる土地などに拘わることなく、ただ「故郷を失う」という経験のみに着目し、それが意味するものについて考えていく必要があるのではないだろうか。

しかし、「故郷を失う」ということは、それを直接に経験した当事者にとつて、非常に苦しみの体験であり、それが必ず語られ、言葉になるとは限らないという事に注意しなければならない。それはある人にとつては思い出すことが非常な苦痛で、絶対に触れられたくない記憶であるかも知れないし、自ら話そうとする人の場合でも、それはその人にとつて非常に勇気が必要な行為であると言える。だから、そのようにして話された事柄は、決して軽々しく扱ってはならないものだろう。

また、注意しておきたいのは、人間が言葉にするものは全て間違いや偏見が入り込む可能性があるという事である。だから、先に述べた記録や伝承などは、全て間違つた事実や誇張、他者への偏つた感情などを、大なり小なり含んだものとして考えていく必要があるだろう。そして、ある出来事について、立場が異なったり、対立してい

る人々が関係している場合、できる限りそれぞれ双方の考えや感情を理解しようとする努力が不可欠であると言えるだろう。そして、もしそれがなされないとするのなら、その出来事についての公平な見方をもつ事は不可能だろう。

ここで、故郷を失う体験が、強く影響を及ぼしている言い伝えの例として、内モンゴルで広く知られているという「アンガハイ鳥の話」という民話を紹介したいと思う。

昔むかし、あるところにアンガハイ鳥がいた。高い上の北にあるねずの木のの上に、黄金の皿のように美しい巣を作って住んでいた。そこで十三個の卵を生んでますます幸せになった。

ある日のこと、北のほうから赤ぎつねがねずの木の根元にやって来た。赤ぎつねは言った。「おい、アンガハイ鳥、おれにそのたくさん卵のうちひとつかふたつよこさないか？」

アンガハイ鳥は答えた。「わたし、アンガハイ鳥が、あなた、きつねに十三個のうちひとつくれるなんて言わないでちょうだい。王さまがいらしたってわたしはひとつもあげないわ！」

きつねは腹を立てていった。「アンガハイ鳥、おまえがおれに卵をくれないというなら、きつねさまは遠くの国から砂ぼこりを巻きあげて、おまえのねずの木をポキリと折ってやるぞ！」

アンガハイ鳥は言った。「あなたがわたしのねずの木をポキリと折ってしまったら、十三個の卵は割れて、わたし、アンガハイ鳥は住む木がなくなってしまうわ！」そして卵をひとつ赤ぎつねに投げてやった。

赤ぎつねは、喜んで卵を食べてしまった。そして次の日も出かけていってアンガハイ鳥をおどかし、また卵をひとつ食べた。

ある日、十二に枝分かれましたりつばな角を持った雄じかが、ねずの木の下にやって来た。その時アンガハイ鳥は知恵も尽きて悲しみの歌を歌っていた。

アンガハイ鳥はしかに悲しみの歌を歌って聞かせ、十三個の卵を毎日ひとつずつきつねにやってしまい、今はもう七つしか残っていないことを話した。

雄じかはこう入れ知恵してくれた。今度きつねが来たらこう尋ねてごらん。「あんたは遠くの国で砂ぼこりを巻き上げるのに必要な八本のひずめをどこに持っているんだね？ ねずの木をポキリと折るための角はどこにあるんだね？」と。誰からその言葉を教えてもらったのだときかれたらこう言ってやりなさい。「よもぎに覆われた高い山の十二に枝分かれましたりつばな角を持った雄じかがわたしにその言葉を教えてくれて、きつねにそれを言うてやれと言ったのです」と。

その後、まもなく赤ぎつねがやって来て卵をよこせと言った。そして前と同じようにアンガハイ鳥を脅した。アンガハイ鳥は雄じかに教わった通りに言った。あんたは、遠くの国で砂ぼこりを巻き上げるために必要な八本のひずめを持っているのか？ ねずの木を折

るのに必要な角はあるのか？ と。

きつねはこの言葉に口答えできなくなり尋ねた。「おまえはだれからその言葉を教えてもらったんだ？」アングハイ鳥は立派な角を持った雄じかが教えてくれたと答えた。

すると赤ぎつねは、雄じかが帰っていった方角をアングハイ鳥に尋ねた。鳥が教えてやるときつねは雄じかを探しにその方角に歩いていった。その後きつねはわなに掛かり、狩人に殺されてしまった。

このようにアングハイ鳥は、よもぎに覆われた高い山の十二本に枝分かれした立派な角を持った雄じかに助けてもらった。そしてその後は、ねずの木の上で、残った七つの卵といつしよに平和に幸せに暮らした。²

この民話は、アングハイ鳥がきつねから、「遠くの国から砂ぼこりを巻きあげて、ねずの木を折ってやるぞ」と脅され、卵を取られてしまうが、りっぱな角を持った雄じかに入れ知恵してもらい、救ってもらおうという、動物たちの話である。しかし、その背景に、騎馬民族の来襲を受けて、何もかも全てを失ってしまった人々の体験が、色濃く反映されている民話と言える。

ここまでで、「故郷を失う物語」と私が名付けたものが、心で経験された事実として、またそれが言い伝えられたものとして世界中に存在しているということについて説明してきた。それは、過去に人々が体験してきた出来事の記録として存在するし、体験をもとにして創られ、伝えられた物語としても存在する。また、現在生きている人の行動や心理の背景にも、その人が社会から受け継いだ物語が影響を及ぼしていると言える。

つまり、過去に人々が経験した喪失の体験は、容易に忘れ去られ、消滅してしまうものではなく、その先の世代へと受け継がれていくものだと言うことができる。それは、受け継ぐ人間たちが存在する限り、簡単に忘れ去られてしまう事はない。それは失われたものの回復を求め、奪った者達への報復を求めている。またそれは、そのような出来事が起こってしまった原因について究明したいと願っている。そして、二度と同じ事を繰り返さないための知恵を伝えようと願っているものである。その一方で、それは、後の人々に類似する経験を持つようにと、強制する力を持つようになる事がある。つまり、以前の出来事とその物語が、それ以後のそれを知った人間に対し、解決を求め、その人の人生でもって以前の物語を再現し、過去の悲しい結末ではなく、喜ばしい、望まれる結末を実現させようとするのである。あるいは過去の体験により獲得されたある考え、知恵を再び思い出させようとする力を持つのである。

今述べたような、後の人間たちに対する強い影響力を持つものの最たるものとして、

旧約聖書を挙げる事ができる。旧約聖書のほとんど唯一の主題は、古代ユダヤ人の故郷を失う物語と、その後の回復の物語であると言ってもよい。例として、旧約聖書の最初の書、創世記の中に書かれている出来事をおおざっぱに書き出したいと思う。

それはアダムとエバの楽園の喪失から始まる。エデンの園で二人は幸せに暮らしたが、蛇にそそのかされ、神の言いつけに背いて善悪の知識の木の実を食べてしまう。二人の目は開け、自らが裸である事を知り、善悪についての知識を知った。二人は神によってエデンの園から追放された。

その後、二人は苦しい生活を老いるまで続けた後に死んだ。しかし、二人の子孫は増えて地上に拡がっていった。その後、人間たちは悪くなってしまった。神は地上に洪水をもたらし、人間たちを滅ぼすことにした。神は、神に従う人であったノアに箱舟を造る事を命じ、全ての動物たちや鳥たちをつがい集めて箱舟に入れ、ノアとノアの家族にも箱舟に入る事を命じた。その後神は大雨を降らせ、地上を水で覆い、人間と動物たちは全て死んだが、箱舟に乗っていた者達、ノアとその家族と生き物達は生き残ることができた。神はノアとその子孫達、また生き物達と契約を結び、二度と洪水で滅ぼすことはしないと約束した。

その後、また人間たちは増えていった。義人アブラムは神の命令に従い、故郷カルデアのウルを後にした。神は彼に、彼の子孫が大いなる国民となる事、約束の地を与える事を約束した。

アブラム（アブラム）は神の約束通りに息子イサクを授かった。イサクは息子ヤコブを得、ヤコブは後にイスラエルの十二部族の先祖となる十二人の息子を持つ事ができた。下から二番目の息子ヨセフは、兄達にねたまれ、商人達に奴隷として売られた。ヨセフはエジプトに連れて行かれたが、後にファラオに重用される事となる。ヨセフは飢きんが来ることを預言し、ファラオからその備えを任される。飢きんが始まるとヤコブとその一族は窮乏におちいり、兄達はエジプトへ穀物を買に行く。そこで、ヨセフと兄達は再会を果たす。ヨセフのおかげでヤコブと一族はエジプトに移住し、生き延びることができた。

その後悪いファラオが王位に就いた。彼はヤコブの子孫たち、イスラエル人を嫌い、重労働を課して虐待し、息子たちを殺そうとした。イスラエル人の子、モーセがファラオの娘に拾われ、王族として育てられた。モーセが成人したずつと後、神が現れ、兄アロンと共にイスラエル人をエジプトから連れ出し、父祖アブラムが住んでいたカナンの地へ導くようにと言った。モーセとアロンは神の言う通り、ファラオの前で多くの奇跡をおこなってファラオを同意させ、イスラエルの民はエジプトを出た。神は紅海の水を二つに分けて、イスラエルの民を通した後、後を追って来たファラオと

その軍勢の上にその水に戻して、溺れさせて滅ぼした。このように、神はイスラエル人をエジプトから導き出された。

創世記のあらすじを追っていくと、それは、人々が安住の地を見つけたかと思うと、それを災害で失ったり、暴力的な支配を受けてそれを失うという話が連続しているという事が解ると思う。そしてそれは、イスラエル人が戦争を繰り返した後に、カナンの地に到着した後も変わる事はない。ダビデ王とソロモン王の時代にイスラエルは繁栄するものの、その後王国は分裂し、その後アッシリアやバビロニアといった王国に滅ぼされ、人々は捕囚として連れ去られてしまう。

この一連の物語においては、人々が土地を喪失することも、再び住む土地を得て幸福な生活を築くことも、どちらの場合も全知全能の神―ヤーウエが関わっている。ヤーウエは人の善悪を判断し裁く神であり、人間を選別する神である。ヤーウエはある人を繁栄させ、勢力をもたせ、幸福にすることもできるし、逆に、病気になるせたり、苦しめたり、死に至らしめることもできる。ある人々の力を強めて他の国を攻めさせ、支配させる事もあるし、ある民族を、他の人々が攻撃し、侵略するままにまかせる事もある。

そして、ノアの洪水のずっと後の時代、ヤーウエは心の正しい人だったアブラハムと契約を結び、その子孫が夜空の星の数ほども増えて、カナンの地を所有し、住み続けると約束した。この契約は、アブラハムの子孫たちがヤーウエに従い続け、その掟を守るなら、ヤーウエは子孫たちを顧み、護りつづけるというものだった。

しかし、ヤーウエは後になって、イスラエル人がその父祖アブラハムのように義人ではなく、悪を行い、彼、ヤーウエに依り頼もうとしないのを見て、イスラエルが他国に攻められ、侵略されるのをそのまま許した。

このように、全能の神ヤーウエの登場する物語において、彼は正義の神であり、人間を評価し、選別する神である。ある人が何かを奪われ、ヤーウエがそれを不当とするのなら、奪われた物は必ず取り戻され、奪った人は裁かれるだろう。同様に、ある人々が住む土地を不当に追われ、もしヤーウエがその人々を顧みるのなら、その土地は必ず再びその人々のものとなり、奪った人々は追い出されるだろう。

ヤーウエは、不当な暴力に苦しむ者を必ず救い出してくださる。ヤーウエは、天から火を降らせ、海の水を分け、様々な奇跡を起こしてご自分の望みを果たされる。別の神々を信じる周囲の民族を利用して、救いの手を差し伸べることもおできになる。ヤーウエは、ありとあらゆる手段を用いて、ご自分の望みを果たし、正義と善を実現されるだろう。

つまり、旧約聖書の物語においては、奪われたものは必ず取り戻されなければなら

ない。土地を迫われた者は、その土地を再び取り戻されなければならない。幸福を奪われた者は、再び幸福にならなければならない、もしその人が死んだのなら、その子孫がそうならなければならない。ヤーウエに従うことによつて、それは必ず実現する事なのである。つまり、旧約聖書とその後続く一神教の物語においては、故郷を失い、そのままというのは、ありえない事である。だからこの場合、「故郷を失う物語」ではなく、「喪失と回復の物語」ということができるだろう。

そして、ヤーウエは、万物と人間の造り主なので、人間の行く末についても知っている。人類の未来について知っているから、預言者を用いて預言させる。そこで語られるのも、やはり、神の正義と善について、それをどんな人間が受けとり、どんな人間が受けとることができずに裁かれるかという事である。

旧約聖書の物語において、神がこれ程までに正義と善を要求するという事は、逆を言えば、人々が正義と善を必要としていたという事に他ならない。つまり、古代ユダヤの人々がこの地上を、不義と悪がはびこる苦しみの世界であると強く感じたことが、神が、正義と善を要求する神・ヤーウエとして現れる、旧約聖書の物語が成立した原因だろう。

旧約聖書によれば、神に従い、正義と善を行う人々は、安住の地を与えられ、幸福に生きることができる。または、一時的に敵に支配されたり、土地を追い出されたりしても、必ず敵に勝ち、土地と幸福を取り戻すことになる。しかし、神に従わず、不義と悪を行う者達は、必ず打ち負かされ、滅ぼされることになる。つまり、正義と善が回復することと、不義と悪が喪失することと、完全な対応する関係になっているのである。

しかし、古代ユダヤ人たちは、一連の旧約聖書の物語においては、一時は神に従い、正義を行ったが、その後は神に従い続けることはできず、正義と善を行い続けることもできなかった。人々は苦しい時はヤーウエに依り頼み、苦痛が去ればヤーウエを忘れてしまった。その繰り返し、旧約聖書の始めから終わりまで、ずっと続いていたと言える。

このことから、旧約聖書の物語を受け継いできた古代ユダヤの人々は、ユダヤ民族により、またユダヤ民族の内側においてなら、神の正義と善を達成することができると考え、そうしたいと願っていたことが解る。このことは、ヤーウエとユダヤ民族との間に結ばれる契約というかたちで表わされている。

しかし、この考え方には、同じ出来事を自分たちの側だけではなく、相手側の人々の立場から考えようとする姿勢が全くないと言えるだろう。しかし、それと同時に、古代の中東地方において、民族同士の土地をめぐる争いがどれだけ深刻で切実なもの

だったか、人々が生き抜いていくことがどれだけ大変なことだったか、争いがどれ程長く続いてきたかという状況を伺わせるものであるだろう。

その後、イエスが登場し、彼の死後キリスト教が始まると、「喪失と回復の物語」は大きく変化することになる。それはユダヤ民族から離れ、ユダヤ人の土地からも切り離されることとなる。ユダヤ人にとつて、それは個人を超えた民族全体のものであった。そして、自らの世代だけでなく、過去の父祖の時代から、未来の子孫の代まで続いていく一つながりのものであった。父が失ったものは子に返されたし、父が犯した過ちに對する罰も、子が受けなければならぬものであったのである。

しかし、イエスが伝えた天の国は、民族全体ではなく、個人に関わるものであった。また、神に従った者に与えられる報いは、現世で与えられるものではなく、死後にも生きることができ、報いを与えられるというものであったのである。人間の救済についてのこの解決策は、イエスが初めて言い出した訳ではないものの、イエスの時代の少し前からのもので、古代ユダヤ人にとっては割と新しいものであった。この考え方によつて、イエスの時代以降には、神が行う評価・選別は、ユダヤ民族という血縁によるつながり・まとまりから、個人の生き方によるものへと変化した。そして神の正義の実現と、土地の所有との対応関係は、キリスト教においては消滅した。

その後、キリスト教は、イエスの命令通りに行った信者たちによつて、ローマ帝国の領土を中心として広く布教されていった。信者たちの心を強く動かしたのは、預言者達の後に続くイエスの物語だった。信者たちは迫害を受けたが、十字架上で死んだイエスと同様の生き方を望み、信仰に関して妥協しようとしなかったために、迫害は凄惨なものとなった。それでも、布教を受けた人々はキリスト教や、神の正義という考え方に少しずつ慣れていき、布教は成功していった。そして、支配者たちがキリスト教を受け入れて、ローマ帝国はキリスト教の国となったのである。

後の時代に、アラビアの地でムハンマドが創始したイスラム教も、個人の生き方を重視したものだった。ムハンマドも、アッラーに従う者は天国に行き、幸福を与えられると人々に説いた。ムハンマドに率いられた初期のイスラム教徒たちは、不正がたびこつている自分たちの国から、偶像礼拝を排除し、社会に正義を実現したいと考え、それに反対した人々と戦った。それはムハンマドが伝えたアッラーの命令であると同時に、旧約聖書の義人アブラハムと同じ物語を生きたいと願うものであった。そしてこの教えは、人々がもしこの事のために命を失っても、その正しい生き方のために天国へ行けるというものであったのである。

このように、キリスト教とイスラム教のどちらも、旧約聖書の物語を引き継ぐものであり、その後に続くものだったという事ができる。しかし、彼らが旧約聖書から受

け継いだものももう一つある。それは、他の宗教との間にある断絶である。それは、古代ユダヤ人と周辺の諸部族という民族間の断絶から、お互いの宗教や宗派の間の断絶へと、形を変えて受け継がれた。断絶とは、他者と理解しあおうとするのではなく、敵とみなし、関わり合ってはならない存在とみなすことである。そして、この断絶の連鎖をたどっていくと、旧約聖書から始まる一神教というものが、全て、人間同士の争いを終わらせるために和解を促すものではなく、相手を敵とみなし、どんな犠牲を払ってでも勝利を収めようとする性質を持つものであるという事が解るだろう。それは、敵に現実には勝つということだけでなく、相手に対する勝敗や相手の自らに対する行為に関係なく、相手より精神的に上の立場に立つことで、勝利しようとするものである。

それは、他の宗教に属する人々の話す事から、自らは何の影響を受けまいとする態度に表れるものである。それはお互いの意見に耳を傾けあい、共通の理解を作りだそうとするよりも、相手の言うことに耳を貸さず、全て自分の持つ知識や経験のみで解決を図ろうとする。

この態度は古代ユダヤ民族の、他民族の暴力による極度の苦しみの経験と、悪の存在への怒りからつくられたものだろう。しかし、その後の一神教の歴史においては、信者たちがこのような態度を表明したとき、それは、相手が自らに対して行った不当で残忍な暴力に対する、極めて正当な態度である場合と、相手と争う必要がなかったり、和解の可能性があるのにも関わらず、争いを起こしてしまう原因となる間違った態度である場合の、両方があるだろう。

それ以外にも、一神教の宗教が争いを引き起こす全く別の状況がある。それは、一神教の宗教の信者たちが不当に他者を侵害し、暴力をはたらくという状況である。このような事はなぜ起こるのだろうか。

それは、人々の自らに対する反省の欠如と、善悪の判断力の欠如が原因だと考えられる。そのような時、人は全く無反省に宗教的情熱に自らを委ねてしまう。また、人々が善悪の判断力を失ったとき、宗教による人々の集合体は、人々の利益を追求する集団へと変化してしまったのではないのだろうか。そのような場合、信者たちの心を動かすその宗教の物語は、善を迫及するためのものから、自らの願望を満たすために解釈を変えられてしまう。その物語がもたらす精神的願望は、現実的な利益を得るための目標と合成されて、自分たちのための全く別の物語とされてしまう。そして、目標を達成するために、他の人々に対する偏見が思い起こされ、相手への怒りや蔑視という感情が、かきたてられることになるだろう。

さらに、宗教による集団が国家や民族による集団と同一である場合、宗教の物語は

国家や民族のそれと合わさり、さらに別のものへと変化することになる。そして、宗教的な価値観が作り変えられ、国家や民族の欲求を倫理的に保証するものとされてしまうだろう。このような過程を経て、宗教と関わりを持った集団により、他の集団への侵略が行われていくことになる。

このような過程は、多くの場合、人々の心の中で無意識に進行していくのかも知れない。しかし、もし人々が気付いていて意識的に行いながらも、自らの行為が不当で残酷なものであり、悪いものであると自ら感じているとするのなら、それを正当化するための論理化や体系化が、必死の努力でなされることだろう。

このようにして、本来は人間に対し正しい行動を要求するはずの宗教が、他者に悪を行うものとなると思われる。もちろん、このような事が起こるのは、一神教だけではないこと、例えば、第二次大戦時の日本の神道でも起きたことであるという事を付け加えておきたいと思う。

ここで話を元に戻したいと思う。キリスト教やイスラム教は布教され、世界中に拡がっていった。そして、「喪失と回復の物語」は世界中に伝えられていった。それは伝えられた人々に何をもたらしたのかという事について考えてみたいと思う。

それは、人々がそれまでに信じていたそれぞれの民族の多神教の信仰にはない、あるものをもたらしたと言える。それは、人が頼ることのできる全てのものを失ったときに、その人を庇護する存在、というものである。これは、人々がそれまで持っていた信仰にはないものだったため、そして、人々が必要としていたものだったために、人々は一神教を受け入れていった。この考え方は、人が全てを失い、極度の苦しみにさらされた場合にも通用し、有効なもので、他者による暴力を経験した人々に強く支持された。

また、この全能の庇護者という存在は、人間を公平に評価するという点で、全ての人間に適用される普遍的な法律や、人間個人の責任という考え方の基礎となった。この点で、一神教の物語は、宗教という枠を超えて、思想全体に影響を与えていると言える。

ではここで、この「喪失と回復の物語」に、個人の人生がどれ程影響されるかという事について考えてみたいと思う。その個人に及ぶ影響とは、まず、その人の現実の人生を、外側から大きく動かす強制的な力である。それは、ある人種や宗教、集団に属しているという理由で加えられる、偏見や差別、暴力である。次にそれは、その人が自らの心を持っている価値観や思想を形づくるものである。さらに、その人の態度や行動にも反映されるものでもある。

そのような影響を受けた人の例として、第二次大戦時にナチスの強制収容所に入れ

られ、生き延びて、その経験を「夜と霧」に表した、K・H・フランクを挙げることは
15
ができる。フランクはユダヤ人で、腕の良い医者だった。彼は妻と二人の子供を持
ち、ウィーンで幸せに暮らしていたが、連行され、アウシュビッツ強制収容所に入れ
られた。フランクの妻や両親、弟や数多くの親類は、同じく収容所に入れられて死
亡した。フランクは収容所内で過酷な強制労働や極度の飢え、暴力や侮辱を経験し
た。彼は飢えや病気で死ぬ寸前の状態にまでおちいり、人が味わう苦痛の全てを味わ
った。そして、彼と一緒に収容されていたほとんどの人は死亡した。

フランクは、ユダヤ人であるというただそれだけの理由で、このような体験をし、
家族や親族を失った。彼は、自らの民族の先祖たちが、歴史上、度々経験してきたの
と同様の、自らと同じ街に住んでいる隣人たちによる暴力を経験したのである。

フランクは、強制収容所の最悪の苦しみの中で、自らの行動を全て強制されてし
まう状況にあっても、自らの態度を自ら決定することによって、「精神の自由」を持ち
続けることができた人が存在したことを書いている。そして、フランク自身も収容
所生活において、この「精神の自由」を保ち続けるために全力を投じていた事、また、
それに成功していた事を、彼の本から知ることができる。

フランクは、強制収容所にいた間も、その後も、人に対する偏見をもたなかった。
あれ程の仕打ちを受けたナチスの側の人間に対しても、偏見や憎しみを持つことなく、
その人の人格を正しく判断することができた。フランクは、長い年月続いてきた、
暴力と憎しみの連鎖を乗り越えた人、勝者だったということが出来るだろう。

一神教の物語についてはここまでとし、ここからは、一神教とは関わりのない民族
の経験した「故郷を失う」体験について考えてみたい。それは、日本の北海道を中心
とした地域で、遠い昔から生きてきたアイヌ民族の経験である。北海道で、明治維新
(1867年)以降に始まった、和人(日本人)による大規模な移住と開拓により、
アイヌの人々が経験した事について考えてみたいと思う。

アイヌ民族は、7、8世紀頃までは、北海道や樺太、千島列島から、東北地方に至
るまで、広い地域に住み、和人とは違う独自の生活・文化を維持してきた民族である。
アイヌの人々は、主として狩猟や採集、漁労で生活を営んでいた。和人のように、ユ
ーラシア大陸の農業や工業の技術を持った人々と交流し、影響を受ける事はあまりな
く、独自の文化を発展させていった。有力な説によると、アイヌの人々は北の方から
船を用いて、千島列島を島伝いに北海道へやって来て、海岸沿いに南下しながら、住
みついていったという。

アイヌの人々は、文字は使用せず、カムイユーカー（神の謡）等の口承文芸を、子孫たちに伝えていった。狩猟や採集を中心とした生活は簡素なものだったが、自然から必要なものを得るための知恵は豊かで、安定した生活を営むことができた。生活のための技術や文化は、自然との関係を強く保ちながら発展していった。ただし、農耕をあまり行わなかったため、同じ広さの土地で養うことのできる人口は、和人と比べて少なく、総人口も少なかった。

8～9世紀頃、東北地方では数度にわたり、和人とアイヌの大規模な戦争があったという。和人は少しずつ北の方へ勢力を伸ばしていき、アイヌ民族との衝突が起こった。そして、和人の勢力は東北地方全域に拡がり、支配を確立した。アイヌ民族とその文化は大部分、和人と混ざり、吸収されていった。

それ以降、和人とアイヌとの接点は北海道より北へと移った。人々は交易を行った。アイヌの人々は、和人の鉄製品や漆器、布地を、毛皮や鮭などと交換して手に入れた。和人は北海道の南端の函館に住みついた。和人はアイヌの人々と対等の関係を結ぼうとせず、圧迫し、暴利をむさぼったため、両者の間にはひんぱんに戦争が起きている。その中でも、1456年のコシヤマインの戦い、1669年のシャクシャインの戦いという大きな戦いがあつたが、いずれも和人が勝利を収めている。

17世紀に江戸幕府が始まると、函館にいた和人の支配者は松前氏と名乗り、松前藩として、幕府から認められるようになった。シャクシャインの戦いの勝利もあり、松前は北海道や樺太の広い地域を支配するようになっていった。そして、交易や漁労のための拠点が海岸沿いに何箇所もつくられた。アイヌの人々は、交易や漁労を取り仕切る場所請負人といわれる商人達に残酷な取扱いを受けた。男は漁場などで重労働を強制され、女は男のいない間に商人に手ごめにされた。1789年には、国後島や根室のアイヌの人々による反乱が起き、反乱の首謀者たち数十名が和人達により処刑されている。

そして、1867年に明治維新が起き、江戸時代が終わって新しい政府が始まると、政府による北海道の全面的な支配が始まり、北海道への移住と開拓が押し進められた。大勢の和人が移住し開拓をした。それにより、アイヌの人々の生活基盤だった自然は大きく変化し、人々の営んできた伝統的な生活と文化は、壊滅的な打撃を受けてしまった。

これから、明治以降に、アイヌ民族の生活や文化がどのように変化したのかという事、またそれによって、アイヌの人々が何を考え、どのような感情を抱いたのかという、人々が心で経験した出来事について考えてみたいと思う。

そこで、明治初期に北海道を訪れ、その後キリスト教宣教師として、老年にいたる

まで北海道に住み続けたイギリス人、ジョン・バチェラーが残した記録を調べる事に¹⁷する。バチェラーは、アイヌ語辞典やアイヌに関する多くの本を出しているが、昭和2年（1927年）に出版された「アイヌの暮らしと伝承」という本がある。この本は、バチェラーのアイヌの地における経験の詳細な記録という事ができる。この本から、明治10年以降の、アイヌの人々の生活の変化について考えてみたい。

バチェラーは、食べ物についてという章でこう書いている。

この島にアイヌだけが住んでいた輝かしい全盛の時代には、食料は豊かで容易に手に入れることができた。この時期、人びとは幸せで満ち足りた生活を送っていた。五十年前に私がこの地を初めて訪れた時でさえ、食料が足りないという声が聞かれる地域は未だ僅かであった。

季節がやって来ると、鮭が群れを成して溯上してきた。その数はおびただしく、所によつてはその魚体を押し合いながら上るので、流れからはみ出されて川岸から跳ね上る鮭がいる程だった。それと併せてカワウソ（獺）や熊も幾らでも獲れる、まことに豊かな時代であった。³

この章でバチェラーは、この地で食用として手に入れることのできる、おびただしい種類の動植物について触れている。それは動物では、ヒグマ、シカ、タヌキ、キツネ、カワウソ、アザラシ、セイウチ、イルカ、ゴンドウクジラ、魚類では、サケ、ニシン、イワシ、タラ、メカジキ、鳥類では、カモ、ガン、ハクチョウ、エゾライチョウ、ヤマシギ、植物では、ギョウジャニンニク、ニンソウ、キイチゴ、ヤマブドウ、クワ、コケモモ、サルナシ、ヨモギなどである。これらの記述からは、バチェラーが北海道を訪れた頃には、アイヌの人々が様々な種類の動物、植物を食物として利用していたこと、それでも長年にわたり自然は損なわれることなく、人々に十分な食料を供給していて、人々が不自由なく、満ち足りて生活していた様子を伺い知る事ができる。

バチェラーは、和人の移住の影響をまだほとんど受けず、昔のままのアイヌの生活をしている人について述べている。

バチェラーの友人で沙流川のずっと上流の方に住んでいたテエ氏と彼の妻は、和人のいない土地で、昔ながらの穏やかな暮らしを営んでいた。その生活はバチェラーから見ても、幸せでただ羨ましく思われるものだった。テエ氏は熊狩りの名手で、一シーズンの猟で九頭ものヒグマを仕留めたという。

そして、テエ氏の家では、山から連れ帰った仔熊を屋内で放し飼いにしていた。仔

熊はまるで人間の赤ん坊のようになっていたが、いずれ成長し、時期がくれば熊祭り(イヲマンテ)を催し、仔熊の命を取ってその霊を神の国に送り、その肉を食べるのである。しかし、このテエ氏のような、狩猟で生計を立てる古来からの伝統通りの生活は、この当時、すでに不可能になりつつあったようである。バチエラーは、この頃すでに、彼の滞在していた平取では、和人により鹿や鮭の捕獲が禁止されていて、黍、ジャガイモ、豆などの畑作物を主食としていたことを書いている。

では、この当時北海道に移住してきた、和人の開拓民たちのほうでは、どのように土地を開墾していったのだろうか。そして、それによって、アイヌの人々の生活はどのようにに影響を受けていったのだろうか。

最初に大規模に開拓を始めたのは、屯田兵と呼ばれ、ロシアに対する防衛と、土地の開墾の両方の役割を果たすために送り込まれた人々だった。屯田兵による開拓は、明治8年から始まっている。彼らは、主に東北出身の土族たちで構成され、平野や盆地に広く区分けされた村を造り、畑を開墾していった。その後、一般の開拓移民もやって来て、それぞれ原野や森林を開墾していった。一般の開拓移民も、東北や北陸出身の人が多かったそうである。

そして、北海道の人口は、月日を追うごとに増加していった。明治維新当時の北海道全体の人口は、アイヌが約2万人で、和人が約10万人程度だったと言われているが、和人の人口のうちの約6万人は、昔から和人が居住していた道南地方のもので、それ以外の地域の和人は、約4万人ということになる。この頃の、道南地方以外の北海道は、ほとんど人の手が加えられていない森林や原野で覆われた状態だったと言える。それから、開拓民の移入により、道全体の人口は、明治17年には約23万人、明治33年には約99万人と、確実に増えていった。

また、明治2年(1869年)、札幌(最初是小樽)に、開拓を促進させるための、開拓使という役所が置かれ、開拓のための莫大な資金が政府によって準備されて、計画が進められていった。

しかし、開拓使による計画には、アイヌ民族の権利や意向についての配慮はほとんどされず、無視されて開拓は進められていったと言える。開拓使は、アイヌ民族が生活のために必要とし、コタン(村)同士で区分けしていたイオル(生活圏)を無視し、勝手に移住者たちに土地を割り当てていった。

また、明治32年に定めた北海道旧土人保護法によって、アイヌによる狩猟や漁を禁止し、勝手に決められた土地を給与して、農業により生活するように強制していった。また、日本語と日本の姓名を使用することを義務づけ、アイヌ本来の習慣を禁止することにより、アイヌの文化を失わせ、和人の習慣を強制する同化政策を進めてい

った。

しかし、アイヌの人々が古来からの生き方を奪われ、苦悶していたのと同時に、和人の移民たちも、土地を開墾し、収穫を上げるまでには、非常な苦しみを経験したようである。まず、北海道まで一族が移民として来るためには、準備のために相当の資金が必要だった。そして、現地にきて開墾を始めてから、一人前に独立するまでには、三〇四年かかるため、その間の生活はとても厳しいものだったという。

森林を畑にするためには、木を伐採して、根を全て掘りださなければならない。それから石などを取り除いて耕し、畑にするのだが、その作業を早く終わらせて、冬が来る前に収穫を得るためには、一家総出で朝から晩まで働き、その苦労は並大抵のものではなかったという事である。

そのため、和人の家庭の中には、乳児や幼児を養うことができずに、アイヌの夫婦へ養子にやるという事がよくあったようである。バチエラーも、このアイヌの夫婦が和人の子を養子にもらうということに言及している。

茅辺かのう氏著「アイヌの世界に生きる」⁴という本には、アイヌの女性に育てられた和人の女性、トキさんの体験談がつづられている。トキさんは、明治39年（1906年）に福島県から来た開拓移住者の子として、生まれて間もなく、北海道の十勝地方へやって来た。しかし、原野の開墾をしながら家族全員が食いつなぎ、冬を越すのは難しく、トキさんは近くに住むアイヌの養母のもとへ、養子に出された。養母は畑仕事をせず、山野から糧を得る昔ながらのアイヌの生活をしていて、トキさんにもその方法を厳しく教えた。養母の家には、実子と養子を含め十人余りの子供がいたという。養母とトキさんら子供たちは、共に外仕事をして、食事をする幸福な生活を送ったという。

その後、トキさんが養子に出されてから十年余り経った頃、トキさんの実母や親せきがひんぱんに訪ねてきて、実母の元へ帰ってきて欲しいと頼んできたという。その頃はすでに、実母たちは畑の収穫を上げることができるようになり、暮らしは良くなりつつあった。そして、実の母子での暮らしをしないと望んで、トキさんに会いにきたのである。しかし、トキさん自身は、養母との生活が続けることを望んでいて、実母の頼みを断ったということである。

トキさんはアイヌとして、アイヌコタンで育てられた。トキさんの養母は日本語を話さず、畑仕事もしなかったが、トキさんはアイヌ語と日本語の両方を話し、畑仕事も覚えていった。トキさんが十三歳の明治7年（1918年）、養母に保護法により給与される農地が正式に与えられ、（ただし、全部ではなく開墾できた分だけである）そこでトキさんたち子供が作物を作ったという事である。トキさんは馬を扱い、唐黍、

稲黍、ジャガイモ、豆を作り、一家を養っていったという。

養母に農地が給与される前年の、大正5年に、トキさんは一度尋常小学校に入学している。しかし、トキさんは学校の行き帰りに、和人の男の子たちに待ち伏せされ、いじめを受けた。また、養母も和人の学校を嫌い、畑での働き手も必要だったため、トキさんは学校を二年足らずでやめ、畑で働くようになった。しかし、トキさんは、学校に行けなかったことを、大人になった後も残念に思っているという。

そして、この頃になると、アイヌ語ではなく、日本語を話すアイヌが増え、アイヌの文化も急速に廃れていった。そして、地域によっても違いがあるのだが、和人からの差別によって、アイヌとして生きることが非常に苦痛となり、アイヌ語やアイヌの習慣を捨てて、和人として生きるアイヌが増えていったという。

前述のバチエラーは、アイヌの女性がかつては必ず行っていた入れ墨の習慣について述べている。⁵バチエラーは、若い娘たちが口の周りに入れている入れ墨を消して欲しいと、彼に頼んでくること、その理由は、入れ墨をしていると和人たちに見下げられてしまうとアイヌの娘たちが思ったためだということを書いている。そして、バチエラーが、入れ墨を消すことはできないと答えると、涙を流す娘もいたという。

そして、彼がこの本を刊行する少し前の時代、大正末期の頃には、彼の周囲では入れ墨はもう行われなくなったようである。

入れ墨というアイヌの慣習は、和人が多数となり、優位となるにつれて廃れていつてしまった。そして、それまでそれを美しいと思っていた当のアイヌの女性たちが、ついにはそれを恥ずかしいと思うようになってしまった。この変化のちょうど境目にいて、自らの入れ墨を消したいと思うようになってしまった女性は、とても気の毒ではないだろうか。

では、この時代にアイヌ民族を襲った、環境や生活の激変は、アイヌの人々自身の心において、どんな経験をもたらしたのだろうか、アイヌの人々は、自分たちが奪われたものや、和人たちから新しくもたらされたもの、移住してきた多くの和人たちとの関わりなどから、どのような考えを持ち、どのような感情を抱いたのだろうか。また、自分たちの将来についてどのような展望をもったのだろうか。

このような事柄について、アイヌのそれぞれの人は、それぞれ独自の考え、感情を抱いたと思われるが、その中の一人として、「アイヌ神謡集」の作者である知里幸恵について取り上げてみたいと思う。「アイヌ神謡集」は、アイヌの人々が数多く受け継いできた、口承文芸のカムイユーカーの中から、知里が十三篇をローマ字で表記し、日本語訳を横に併記したもので、大正12年（1923年）に出版されている。

知里は、明治36年（1903年）に、登別で生まれた。父母ともにアイヌで、父

はコタンの有力者の家柄であり、馬の牧場を経営していた。

知里は家庭の事情により、おばマツに預けられている。マツは前述のバチエラー牧師により伝道師となっていて、旭川の伝道所に住んでいたため、知里もそこで、マツと共に生活している。

知里は尋常小学校に在学していた頃から優等生で、高等小学校、女子職業学校へと進学していった。ちなみに、知里幸恵の弟、真志保も同様に秀才で、東京帝大まで進み、言語学者として成功している。

しかし、この時代にアイヌの子供たちが学校へ通い、進学していくのは並大抵の苦労ではなかったようである。知里真志保は、在学していた室蘭中学校で、教室で受ける白眼視に耐え切れず、学校を休みがちで、その代わりに図書館へ通っていたと回想している。また、アイヌの子供たちは、学校へ行くと差別を受けるので、それに負けないように、和人の子供たちから低くみられないようにと、なるべく良い着物を着て学校へ行ったということもあつたようである。

知里幸恵は十五歳の時に、旭川を訪れた言語学者の金田一京介博士と出会い、アイヌ語やユーカラを研究し保存したいという願いを持つようになる。その後も知里と金田一博士の交流は続き、知里は十九歳の時上京し、「アイヌ神謡集」を出版する準備が整うのだが、生まれつき心臓が悪かった知里は、出版される日を見ることなく、急死してしまう。

知里は、和人の学校に学び、和人と肩を並べようと必死に努力したが、ただ和人の社会で生きていくとしただけでなく、アイヌの昔の生活や文化が忘れられ、なくなってしまう一つあることを悲しんでいた。

「アイヌ神謡集」の序文を読んで頂きたいと思う。

その昔この広い北海道は、私たちの先祖の自由の天地でありました。天真爛漫な稚児の様に、美しい大自然に抱擁されてのんびりと楽しく生活していた彼等は、真に自然の寵児、なんという幸福な人たちであつたのでしょうか。

冬の陸には林野をおおう深雪を蹴って、天地を凍らす寒気を物ともせず山又山をふみ越えて熊を狩り、夏の海には涼風泳ぐみどりの波、白い鷗の歌を友に木の葉の様な小舟を浮べてひねもす魚を漁り、花咲く春は軟らかな陽の光を浴びて、永久に囀ずる小鳥と共に歌い暮らして路とり蓬摘み、紅葉の秋は野分に穂揃うすすきをわけて、宵まで鮭とる篝も消え、谷間に友呼ぶ鹿の音を外に、円かな月に夢を結ぶ、嗚呼なんという楽しい生活でしょう。平和の境、それも今は昔、夢は破れて幾十年、この地は急速な変転をなし、山野は村に、村は町にと次第々に開けていく。

太古ながらの自然の姿も何時の間にか影薄れて、野辺に山辺に喜々として暮らしていた

多くの民の行方も亦いずこ。僅かに残る私たち同族は、進みゆく世のさまにただ驚きの眼をみはるばかり。しかもその眼からは一挙一動宗教的観念に支配されていた昔の人の美しい魂の輝きは失われて、不安に充ち不平に燃え、鈍りくらんで行く手も見わかず、よそのお慈悲にすがらねばならぬ、あさましい姿、おお亡びゆくもの……………それは今の私たちの名、なんという悲しい名前を私たちは持つているのでしょうか。

その昔、幸福な私たちの先祖は、自分のこの郷土が末にこうした惨めなありさまに変わろうなどとは、露ほども想像し得なかつたのでありましょう。

時は絶えず流れる、世は限りなく進展していく、激しい競走場裡に敗残の醜をさらしている今の私たちの中からも、いつかは、二人三人でも強いものが出てきたら、進みゆく世と歩をならべる日も、やがては来ましょう。それはほんとうに私たちの切なる望み、明け暮れ祈っている事で御座います。

けれど……………愛する私たちの先祖が起伏す日頃互いに意を通じる為に用いた多くの言葉、言い古し、残し伝えた多くの美しい言葉、それらのものもみんな果敢なく、亡びゆく弱きものと共に消失してしまうのでしょうか。おおそれはあまりにいたましい名残り惜しい事で御座います。

アイヌに生まれアイヌ語の中に生いたった私は、雨の宵、雪の夜、暇ある毎に打集つて私たちの先祖が語り興じたいろいろな物語の中極く小さな話の一つ二つを拙ない筆に書き連ねました。

私たちを知つて下さる多くの方に読んでいただく事が出来ますならば、私は、私たちの同族祖先と共にほんとうに無限の喜び、無常の幸福に存じます。

この文において、知里は自らが願っている二つの事について述べている。一つめは、アイヌの同胞の中から、強い人が出て、進展していく世と歩を並べて、進んでいけるようになる事、もう一つは、アイヌの人々が先祖から受け継いだ言葉や物語が失われることなく書きとめられ、多くの人に読まれるようになるという事である。

そして、知里のこの二つの願いは、「神謡集」の最初に収められている謡「銀の滴降る降るまわりに」の内容からも伺われるように思われる。知里がこのカムイユーカーラを、一番最初のものとして選んだことは、本人が意識していたかどうかは分からないが、私には決して偶然の事ではないと思えてならないのである。この謡のあらすじを紹介したいと思う。

私（梟の神）が「銀の滴降る降るまわりに、金の滴降る降るまわりに」という歌を歌いながら人間の村の上を通り、下を眺めると、昔の貧乏人が今お金持ちになって、昔のお金持ちが今の貧乏人になっている様です。海辺に人間の子供たちがおもちゃの小弓と子矢を

もってあそんでいます。

私がその上を通りますと、お金持ちの子供たちは、神様の鳥である私を射当てようとして、金の小弓に金の子矢を番えて私を射たので、私は金の子矢を、下を通したり上を通したりしました。その子供たちの中に、一人の貧乏人の子供が入っていました。けれどもその子の眼色をよく見ると、えらい人の子孫らしく見えます。その貧乏人の子も、ただの（木製の）小弓にただの子矢を番えて私をねらいますと、お金持ちの子供等は大笑いして、貧しい子供を足蹴にしたり、たたいたりしました。私はそれを見て大層不憫に思い、貧乏な子の子矢を取り、回りながら下に舞い降りました。

貧乏な子は一番にかけつけて、私を取ると、お金持ちの子供たちは後から走って来て、悪口をつきながら、貧乏な子を押したりたたいたりしましたが、貧乏な子は私の上におおいかぶさって、しっかりと私を押さえていました。それからもがいて、やつとの事、人の隙から飛び出しますと、どんどんかけ出しかけ続けて、一軒の小屋の表へ着きました。

そして、子供は第一の窓から私を入れて、出来事について物語りました。すると中から老夫婦が出て来て、老人は私を見ると、私にいていねいに言葉をかけ、何遍も礼拝をしました。老婦人は、東の窓の下に敷物をしいて私をそこへ置きました。それからみんな高いびきで寝入っていました。

私は私の体の耳と耳の間に坐っていましたが、真夜中に起き上がり、「銀の滴降る降るまわりに」という歌を歌いながら飛びました。すると私のまわりに神の宝物が落ち散りました。私はこの小さい家を宝物で満ちた後、家を大きな家に作り変え、その後もと通り、私の体に戻りました。

家の人たちが起き出して家の中を見ると、床の上に腰を抜かしてしまいました。老人はその後、涙をこぼしながら私の処へ来て礼拝を重ね、お礼の言葉を申しました。それから老人はイナウ（御幣）を作り、私を飾りました。老婦人は酒を作り、六つの酒樽を上座に並べ、小さい子は使いに出て、お金持ちの人々を招待しました。

お金持ちの人々は、貧乏人を笑ってやろうと家の前まで来ましたが、立派な家の様子を見て、はずかしがって帰ったり、腰を抜かしたりしました。家の主人は言いました。「この様に、貧乏人でへだてなく互いに往来も出来なかったのだが、大神様があわれんで下され、何の悪い考えも私どもは持っていませんでしたのでこの様にお恵みを頂きましたのですから、今から村中、私共は一族の者なんですから、仲善くして、互いに往来をしたいという事を皆様に望む次第であります」

その後、人々は、心が柔らかいで、酒宴が開かれました。私は、火の神、家の神、御幣棚の神と共に人間たちの舞を眺めて楽しみました。その後、私は人間たちが仲の善いありさまを見て安心して帰りました。それ以来、アイヌ村は、仲良く、あの老人が頭になり、あの子供も妻や子を持ち、父や母に孝行しています。私も人間たちの後ろに坐して、人間たちの国を守護しています、と、ふくろうの神様が物語りました。⁷

知里は、幼少の頃から成績優秀だったが、アイヌであるがゆえに非常な苦勞をして進学した。その自分の姿を、このカムイユーカーの、お金持ちの子たちの中に一人混ざっている貧乏人の子になぞらえていたのではないだろうか。貧乏人の子は、お金持ちの子たちから足蹴にされたりたたかれたりしながらも、木の弓と木の矢で梟の神を狙い、それを不憫に思った梟の神は、貧乏人の子の矢を取って地上に舞い下り、貧乏人の子は梟の神を家に持ち帰る。

知里は勉強が良くできただけでなく、文学的な才能を持っていた。アイヌのユーカラやウエケベレ（散文説話）を聞いて育ったので、その美しさや楽しさをよく知り、その価値を理解していた。また、学校で日本語もよく勉強し、美しい文章を書くこともできた。彼女は他の子供にはない宝物を持っていて、ちょうど、梟の神を取り、他の子にたたかれながら持ち帰った貧乏人の子のようだったと言えるだろう。

しかし、彼女は、その宝物をただ自分のものとする訳にはいかなかった。彼女の周囲の同胞の人々は、昔からの伝統的な生活を失い、よそから持ち込まれ、強制された新しい生活の方法にも、すぐには慣れることはできないままに、和人と競争にさらされて追い詰められつつあった。そして、人々は未来への見通しがつかない状況のまま、気がつくと、自らが持っている美しい文化も忘れてしまうか、あるいは自らそれを否定してしまう、そんな状態に置かれていたのではないだろうか。

そして、貧乏人の子が梟の神を家へ持ち帰り、老人が神を拝した後、梟の神が、この家を大きく作り直し、宝物でいっぱいにしたように、知里は、同胞の人々が以前はそうだったように、豊かで幸福な暮らしを取り戻して欲しいと願っていたのだろう。そしてこの話で、昔お金持ちで今貧乏な人と昔貧乏で今お金持ちの人が和解し、仲良くなったように、現実にも、アイヌの人々が差別を受けることなく、生活できるような世の中になって欲しいと願っていたのではないだろうか。

今まで見てきたように、明治から大正にかけてアイヌ民族が経験した事柄は、まぎれもなく、「故郷を失う」という過程をたどるものだった。そして、アイヌの人々は、自分たちが不当にも住む場所や生活、文化などを奪われてしまったという事について、いろいろな考えを持ち、感情を抱き、そのことについて言葉で表現した。

アイヌの人々が失ったものについても一度考えてみたいと思う。大勢の和人の移民・開拓により、アイヌの人々の生活が成り立つ前提であった自然は、大きく姿を変えていった。山林や原野は人のすむ場所となり、動物たちの数は減少してしまった。そのため、アイヌの人々が昔から続けてきた生活を、続けるための環境そのものが、

損なわれてしまったと言えるだろう。そこには、よそ者である和人が住みつき、アイヌの人々の生活のための知恵や能力は、それを発揮する場所を失ってしまった。

また、自然はアイヌの人々の神話、カムイユーカーの舞台だった。熊や梟などの動物たちや、自然界の様々な現象は、人々にとって神であり、人々の心においてそれぞれの役割を担っていた。自然環境の変化によって、そのような、心で経験される世界も侵害されていっただろう。それはアイヌの人々にとって、自らの内の価値あるものを喪失していく過程だっただろう。

アイヌの人々は、和人の定めた旧土人保護法により、鹿漁、鮭漁を禁止され、農業のための土地の給与という形で、本来持っていた土地の利用権を奪われた。また、日本式の姓名や日本語の使用の義務付けにより、アイヌ語やアイヌ文化を失っていった。これらの同化政策は全て強制で、アイヌ民族の自己決定権は、全く無視されたと言える。

また、和人によるアイヌ民族への差別が存在した。もちろん、全ての和人が差別をしたというわけではない。開拓移民は開墾初期、アイヌの人々の助けを必要とする状況におかれることが多く、しばしば助けられたということである。また、アイヌの人々の側でも、農業や畜産の技術を和人から教えられて、自分のものにしていっただろう。ある場面では、アイヌの人々と和人とは、お互い助けあって生きていたと言えるだろう。また、アイヌの子供たちが進学し、上の学校へ行く機会も、一応は開かれていたと言える。

しかし、和人の人々の中には、一般民衆から上の役人に至るまで、アイヌの人々が自分たちより、一段低い下の人間であるという見方を持つ人々が、少なからずいたと言える。そのような見方は、アイヌの人々に対する横柄な態度や、アイヌは日本人のように生きるべきだと考えるような偏見、また、だまして土地を奪ったり、アイヌの子供をいじめて学校から追い出すといった行動に表れた。

では、アイヌの人々の側では、自らの生活や文化を、どのように取り戻そうとしたのだろうか。人々は、かつての生活を続けることはできなかったが、新しい生活に適応し、和人中心の社会で生き抜いていった。多くの人は、長年生活してきた土地を離れず、農業や畜産、林業や漁業などの地元の産業に従事し、働いた。しかし、アイヌの子供たちが進学し、地元を離れて就職するのは困難だった。

そして人々は、天皇陛下の臣民として国に尽くすという、当時の日本人全てに教え込まれた価値観を、ある程度共有するようになっていった。そしてアイヌ民族の中の多くの人は、アイヌであるがゆえに差別を受け、苦しんだ体験をもったため、アイヌの言葉や文化を忘れようとし、アイヌとして生きることをやめようとした。

その一方で、アイヌ語やアイヌの文化を保存し忘れまいとして、活動した人も多く存在した。先に述べた知里幸恵や知里真志保は、そのような人々の先駆者と言えるだろう。そして現在に至るまで、そのような活動は続いている。アイヌ語で親と会話しながら成長し、覚えていった世代は、現在はいもう年老いてしまい、ほとんど生き残っていないが、過去数十年間、アイヌ語を音声として保存する努力が続けられてきた。そして、北海道内各地でアイヌ語教室が開かれている。

現在も、北海道アイヌ協会などや、多くのアイヌの人々によって、アイヌ民族の生活向上や権利の回復、文化の保存や発展の努力が続けられている。また、世界の他の先住民族と連携しながらの権利回復の運動が進められている。

また、ここ数年間で、アイヌ本来のイオル(生活圏)の回復の試みがなされている。この試みについては、今後の成果に期待が持たれるものだろう。また、アイヌ民族独自の感受性を生かして、美術や民族音楽の分野で活躍している人々の存在も、見逃せないだろう。

現在、アイヌの人々は、日常生活においては和人と変わらない生活を送っているが、多くのアイヌの人々にとって、その独自の文化はかけがえのないもので、心の支えとなっている。当然だが、人々は現在もなおアイヌとして生きようとしている。

以上のように、世界中の類似の出来事に「故郷を失う物語」という共通項が見いだせるということについて説明した。その例として前半では主に旧約書と一神教の、数千年もの長い年月に及ぶ物語を取り上げ、後半では、アイヌ民族の経験した「故郷を失う物語」を取り上げた。

前半で取り上げた一神教の物語は、数千年前から現在に至るまでの長い時間続いているものであり、世界中の過半数の人々に影響を与えている大きなものだった。それは世代を超えて受け継がれ、物語の続きを付け加えられていった。そして現実の歴史と密接な関係を持ち、相互に影響を及ぼし合いながら、時間と共に進行していくものだった。

後半では、アイヌ民族と和人との長い関わりあいの中で、明治から大正までの数十年という、比較的短い期間の出来事を主に扱った。アイヌの人々がどのような経験をされたのか、それについてどのような考えや感情を抱いたのかということについて、残された記録やアイヌの人々自身の書き残した言葉から、考えてみた。

前半でもすこし述べたのだが、世界中の人々の経験の中から、この「故郷を失う物語」という要素を持つものについて、見つけ出し、調べるということには、どのような意味があるのだろうか。まずそれは、それぞれの事例について、喪失されたものの

価値について確認し、認識するといふものである。

喪失の体験をした人々は、いったい何を失ったのだろうか、それは、身近な人の人命や、自らの尊厳、自らが送ってきた生活の全て、また、価値を感じてきた文化などである。これらのものは、奪われた本人にとってはかけがえのない、命にも換え難いものだが、奪った側から軽視され、価値のないものとして扱われて奪われるに至ったのではないだろうか。だから、奪われた人が何を、またどのように奪われたのか、そのいきさつについて、またその体験についてどのような、どれほどの感情を持ったのかという事について、明らかにされ、多くの人が知るようにならない限り、奪われたものの価値についての正しい認定はされることはないだろう。そして、人命や人権、文化の価値についての正しい評価を行う努力を続けていかなければ、他者への権利の侵害や暴力はなくなることはないだろう。

そして、このような喪失の体験は、それを受け継いだ人々のその後の文化へ大きな影響を与えるものである。その影響は、喪失の体験そのものを記憶し伝えるということとであり、人々のそれまで持っていた伝統を守り、残そうとする努力ともなる。そして、このような努力を行うことによる文化の新しい展開をもたらす可能性でもあるだろう。この影響力を抜きに人間の文化の成り立ちを説明することはできないと言える。だから私たちが、自分自身について、あるいは他者について理解したいと願うとき、受け継がれた「故郷を失う」体験と、その物語について考慮する必要があるだろう。このような理由から、「故郷を失う物語」について知ろうとする必要性があると言えるのではないだろうか。

—

参考資料

- ¹ 東京大学出版会 史料で読むアメリカ文学史③ 47ページ
- ² ぎょうせい 世界の民話21 モンゴル・シベリア 31ページ
- ³ 北海道出版企画センター アイヌの暮らしと伝承 78ページ
- ⁴ 筑摩書房 アイヌの世界に生きる
- ⁵ アイヌの暮らしと伝承 40ページ
- ⁶ 岩波文庫 アイヌ神謡集 3ページ
- ⁷ アイヌ神謡集 11ページ